

曾根遺跡群Ⅷ

平原周辺遺跡 (4)

福岡県前原市国指定史跡「曾根遺跡群」

重要遺跡確認調査概要

前原市文化財調査報告書

第 50 集



1 9 9 3

前原市教育委員会

序 文

平原遺跡は昭和40年に発見され故原田大六氏を中心に発掘調査が実施されました。当時のはのかな田園風景が広がっていたこの地にも、昭和50年代後半には宅地化の波が押し寄せ、現在では遺跡のすぐ傍にも住宅が建ち並ぶようになってまいりました。このことを憂慮した当教育委員会では、平原遺跡周辺の実態を把握するために昭和63年度から国・県の補助を受けて確認調査を実施しているところであります。

本年度は、昨年度の調査で確認された方形周溝墓について追加調査を実施いたしました。調査は遺跡の保存を考慮し最小限に止めておりますが、多くの成果をあげるとともに指定地の方形周溝墓との関連をはじめとして解決すべき問題もまた多く読み出す結果となりました。今後は遺跡の保存・環境整備等様々な課題の解決に向けて一層の努力をいたす所存であります。

なお木筆となりましたが、昨年度に引き続き発掘調査について快諾戴きました地権者の小川嘉門氏、松藤榮樹氏には深謝の意を表します。

平成5年3月31日

前原市教育委員会
教育長 梶木昭生

例 言

1. 本書は平成4年度に国・県補助を受けて前原市教育委員会が実施した平原周辺遺跡の重要遺跡確認緊急調査の概要報告である。
2. 本書に掲載した実測図の作成は角 浩行、岡田りつ子、柏田睦子、和多治子が行い、遺物の実測は角が行った。
3. 本書に掲載した図面の製図は角、末益真奈美が行った。
4. 本書に掲載した現場写真の撮影は角が行い、遺跡全景写真の撮影は御空中写真企画が行った。また、巻首および巻末の遺物写真は岡紀久夫の撮影によるものである。
5. 本書に示した方位は座標北である。
6. 本書の執筆、編集は角が行った。

表紙写真は、曾根丘陵（南上空から）

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 調査の記録	3
1. 調査の概要	3
2. 遺構と遺物	6
III. おわりに	9

挿図目次

Fig. I (巻首) 平原遺跡出土品Ⅰ (重要文化財)	
Fig. II (巻末) 平原遺跡出土品Ⅱ (重要文化財)	
Fig. 1 平原遺跡周辺地籍図 (1/2,000)	1
Fig. 2 平原遺跡の位置と周辺の主な遺跡 (1/15,000)	2
Fig. 3 平原遺跡と調査地点 (南から)	3
Fig. 4 調査地点全体図 (1/100)	4
Fig. 5 第1～5次調査トレンチ位置図 (右) (1/1,000)	5
Fig. 6 第5次調査トレンチ設定状況 (下) (1/500)	5
Fig. 7 方形周溝墓	6
Fig. 8 主体部	7
Fig. 9 周溝上層断面実測図 (1/30)	7
Fig. 10 甕 棺	8
Fig. 11 周溝内土器出土状況 (土器2)	8
Fig. 12 出土遺物実測図 (1/4)	8
Fig. 13 第5次調査区全景 (上から)	10



方格規矩鏡
(3号鏡 径20.9cm)



方格規矩鏡
(17号鏡 径16.1cm)

Fig. 1 平原遺跡出土品 I (重要文化財)

1. はじめに

1. 調査にいたる経過

平原遺跡（「国指定史跡曾根遺跡群」）周辺の重要遺跡確認緊急調査は昭和63年度から平成3年度まで4次にわたり実施している（岡部1990、1991 角1992）。昨年度は円形住居跡、土坑、ピットと共に方形周溝墓が検出された。しかし方形周溝墓については遺溝検出を行ったのみで、時期、規模等についての詳細は不明であった。本年度は方形周溝墓の追加調査と指定地の方形周溝墓との関係を明らかにする目的で調査区の一部を拡張して遺溝の確認を行うこととした。当初は3-2番地まで調査区を拡張する予定であったが、諸般の事情から地権者の承諾が得られず調査を断念せざるをえなかった。



Fig. 1 平原遺跡周辺地籍図 (1/2,000)

2. 調査の組織

本年度の発掘調査に係わる組織は以下のとおりである。なお、前原町は平成4年10月1日の市制施行により前原市となった。

地権者	小川 嘉門、松藤 榮樹
調査主体	前原市（町）教育委員会
総括	教育長 樽木 昭生 教育部長 菊竹 利剛（平成4年4月～11月 文化課長兼務） 文化課長 清水 義弘（平成4年12月～） 文化課文化財係長 川村 博
庶務	同 文化振興係長 古村 耕治
調査	同 文化財係主事 角 浩行

なお現地にて調査指導を頂いた文化庁文化財保護部記念物課河原純之主任調査官、福岡県文化財保護審議員渡辺正氣先生、福岡県文化課文化財保護室柳田康雄室長、同浜田信也記念物係長には心より感謝申し上げます。

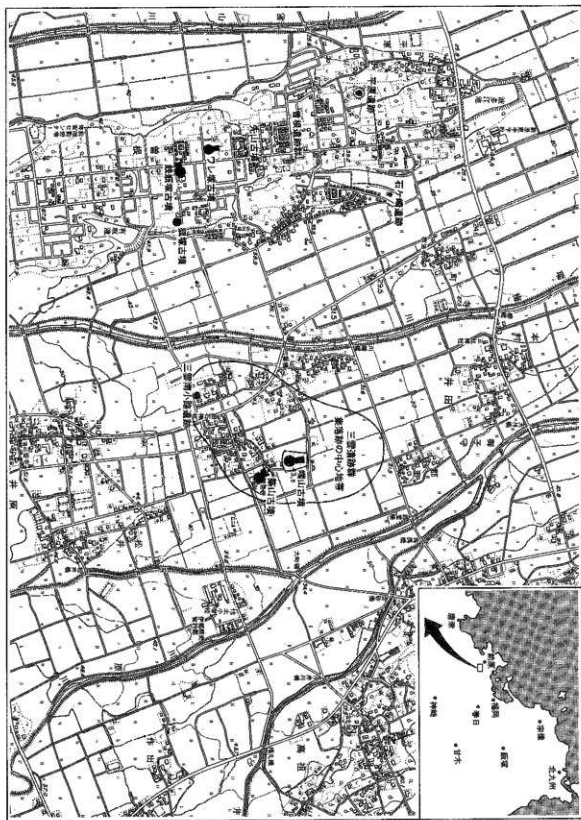


Fig. 2 平原遺跡の位置と周辺の主な遺跡 (1/15,000)

Ⅱ. 調査の記録

1. 調査の概要

方形周溝墓については、まず周溝の四辺にそれぞれトレンチを設定した。北側のトレンチを第1トレンチとし、以下右回りに各々第2～4トレンチとした。第2、4トレンチについては北東側と南西側の対角の角を確認するためにそれぞれ拡張を行った。南東角にも第6トレンチを設定した。甕棺については掘り方と周溝の前後関係を確認するために第5トレンチを設定した。その結果南側の広がる部分は周溝が掘り直されており、これは甕棺の埋葬に伴うものであることが判明した。

主体部についてはほとんど攪乱されていたが、部分的に掘り方と考えられる土層が確認されており、主体部の遺存状況を確認するため攪乱土を除去した。その結果主体部の一部が遺存していることが判明した。

また周溝から東側に延びる溝の続きを確認するために、調査区の東側（指定地側）を約3m拡張した。ところが溝は途中で途切れており、指定地の方形周溝墓には続いていなかった。拡張した部分からは新たに土坑、ピットが検出された。



Fig. 3 平原遺跡と調査地点（南から）

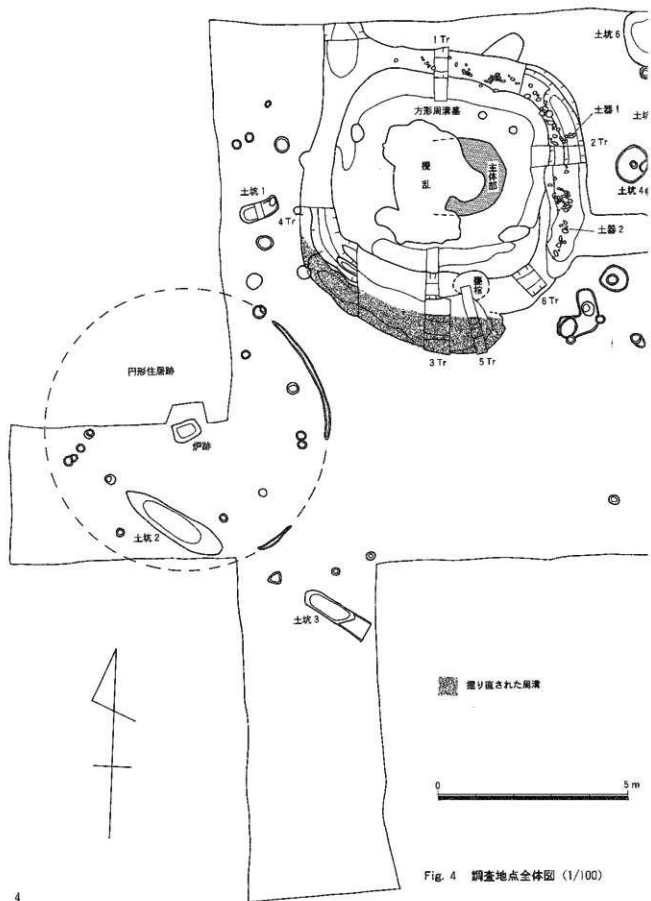


Fig. 5 第1～5次調査
トレンチ位置図(右)
(1/1,000)

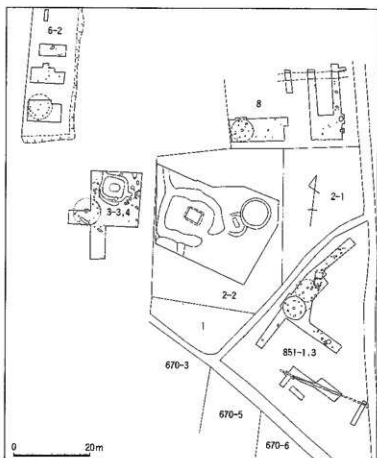
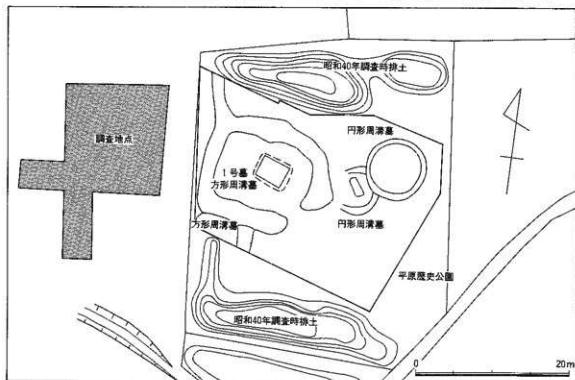


Fig. 6 第5次調査
トレンチ設定状況(下)
(1/500)



2. 遺構と遺物

(1) 方形周溝墓

墳丘は東西5.6m、南北6.3mの隅丸方形を呈する。周溝の幅は0.75~1.0mで、附溝を含めると東西7.5m、南北8.0mとなる。第3トレンチでは内側にもう1本周溝が検出されており、南側では周溝が掘り直されていることが判明した。しかもこの周溝は後述する甕棺の埋葬に伴って掘削されている。内側の周溝は幅0.7mを測り、築造当初の墳丘は東西5.6m、南北5.2m、周溝を含めると東西7.5m、南北6.6mであったと考えられる。また、周溝は当初は全周していたが、外側の溝を掘削した際に南東隅に陸橋が造り出された可能性がある。

墳丘は盛土で成形されていたようで第2、3トレンチでは周溝内に盛土が流れこんでいる状況が確認された。溝の埋土のうち暗黄茶褐色土層がそれである。東~北側の周溝内から拳大の石が

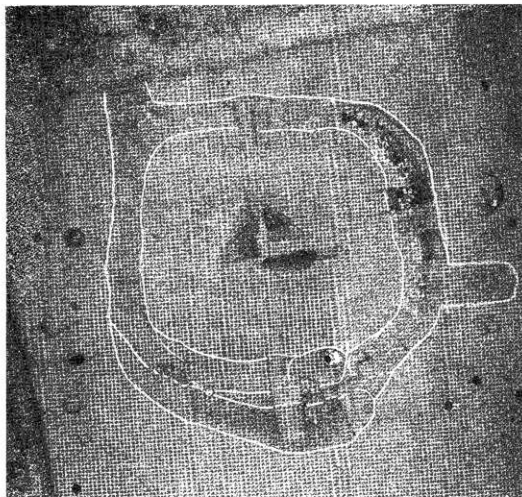


Fig. 7 方形周溝墓

带状に検出されたが、これらは全て流れ込みである。調査地点の地山には全く石が含まれないことから、墳丘には少なくとも貼石が施されていたと考えられる。

主体部は墳丘のはば中央に位置しているが、ほとんどが攪乱を受けていた。攪乱坑の東側にそれと思われる土層が存在していたため、攪乱土を全て除去して断面の観察を行った。すると主体部と考えられる掘り込みが確認された。掘下げを行っていないので詳細は不明であるが、掘り方は2段となっており1段目は幅2m、深さ20cmが、2段目は幅70cm、深さ50cmが遺存している。断面には石が見られないので土壌墓と思われるが、木棺の可能性もある。主軸は東西方向に向いている。



Fig. 8 主体部

壙棺は内側の周溝内に位置していた。土層の観察で周溝の埋土が壙棺の掘り方に切られていることが判明し、周溝墓の築造後に壙棺が埋葬されたことがわかった。それと同時に外側の周溝が掘られ、墳丘を帯形している。壙棺は頸部を打ち欠いた壺形土器であり、単棺で高杯を蓋として

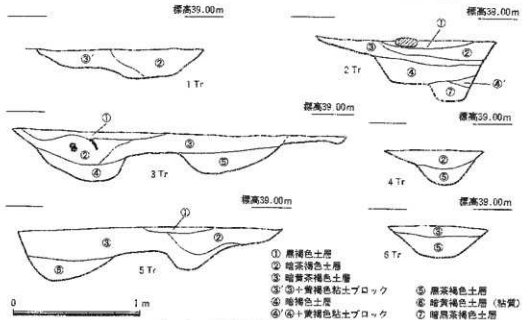


Fig. 9 周溝土層断面実測図 (1/30)

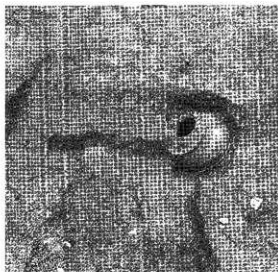


Fig. 10 罌 棺



Fig. 11 周溝内土器出土状況 (土器2)

使用している。棺内には赤色顔料が塗布されていた。出土遺物は蓋として使用していた高杯の破片が出土したのみで、副葬品は無いようである。

(2) 土坑

拡張区で新たに3基の土坑が検出された。土坑4は100cm×84cmの楕円形で、深さ15cmである。土坑内にピットが2個検出されているが、壁際のもは後世のものであろう。土器片、木炭片が出土している。土坑5は長さ106cm、幅60cmの隅丸長方形で、深さ32cmである。土器片、黒曜石等が出土した。土坑6は長さ146cm、幅105cmの楕円形で、深さ43cmである。土器片、黒曜石等が出土した。

(3) 出土遺物

周溝内から高杯の杯部と脚部がそれぞれ1点ずつ出土している。1は鋸形口縁を持ち全体に放射状のミガキが施されている。全面丹塗りで、口径30.8cmである。2は脚部で外面にミガキが施されている。内面はナデである。外面丹塗りで、現存高15.1cm、底径18.0cmである。いずれも中期末～後期初頭のものである。

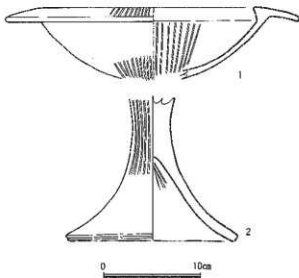


Fig. 12 出土遺物実測図 (1/4)

Ⅲ. おわりに

今年度の調査成果について概略をまとめておわりとしたい。なお、平原遺跡においては現在まで方形周溝墓と円形周溝墓各々2基、計4基の周溝墓が検出されている。そこで今回検出された周溝墓を5号墓と呼ぶことにする。

まず5号墓の築造時期であるが、周溝内から出土した高杯からみると中期末～後期初頭と考えられる。墳丘は量の多少は別として盛土により成形されており、貼石も施されていたことが確実である。貼石については現状では部分的に施されていたとしか言えない状況であるが、おそらくは全周していたのであろう。平面形は当初東西5.8m×南北5.2mのほぼ方形を呈していたが、甕棺の埋葬に伴い東西5.6m×南北6.3mの南辺が弧状を描く形となり、周溝を含めると東西7.5m×南北8.0mとなる。またこれに伴い南東隅に階梯部が造り出された可能性があるが確認するには到らなかった。甕棺は蓋に使用していた高杯と共に中期末～後期初頭と考えられ土器型式からみると周溝墓の築造と時期差はないが、甕棺の掘り方が溝の埋土を切っていることから、実際には若干(周溝がある程度埋まるくらい)の時間差があったのであろう。主体部については中央部に土壌遺(あるいは木棺か?)1基が存在するのみで、墳丘内にはわずかに先記した甕棺1基が確認されたのみである。

木周溝墓の時期から問題となるのが、平原1号墓の時期である。調査では5号墓と1号墓の直接的な関係は確認できなかったが、1号墓の年代をこれまで考えられているように弥生終末ないしは古墳時代初頭とするには、いま一度検討の必要があるのではないだろうか。昭和40年の調査では他にも1基の方形周溝墓の存在が指摘されており、これらが相前後して築造された可能性も考えられる。

近年北部九州においても弥生時代の墳丘墓や周溝墓等の区画を有する墓が相次いで発見されており、時期的にも前期まで遡ることが知られている。しかしそれは現在のところ北部九州においては主流とはなりえていないようで、大多数は群集墓である。また北部九州の区画墓には複数の埋葬施設が見られるものがほとんどであり、埋葬施設が1～2基のものは三雲南小路遺跡、須玖阿木遺跡D地点の王墓といわれるもの2つだけである(古摺1989)。またこれらの埋葬施設は甕棺である。平原遺跡(周溝遺跡を含む)では後期の甕棺墓は今のところ検出されておらず、方形周溝墓のみで墓地为形成されている可能性があり、方形周溝墓の埋葬施設の数や構造においても北部九州では特異なものであるといえる。また貼石をもつものも確認されていないようである。これらのことが本遺跡の全体像としてとらえられるのかどうかは今後さらに周辺の調査を行い確認する必要がある。

(引用文献)

- 岡部裕俊 1990 『平原周溝遺跡(Ⅱ)』 前原町教育委員会
- 岡部裕俊 1991 『平原周溝遺跡(Ⅲ)』 前原町教育委員会
- 角 義行 1992 『平原周溝遺跡(Ⅰ)』 前原町教育委員会
- 吉原秀敏 1988 「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓—北部九州における弥生時代区画墓の一例—」、『九州考古学』

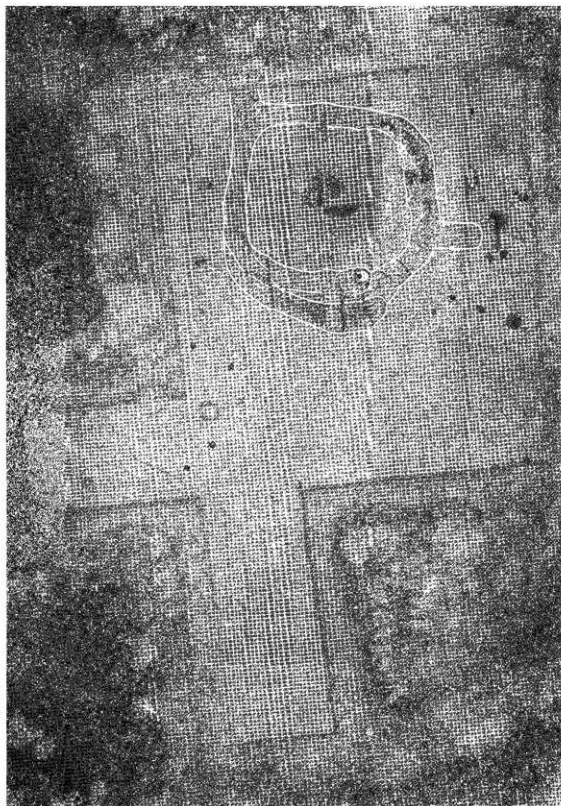
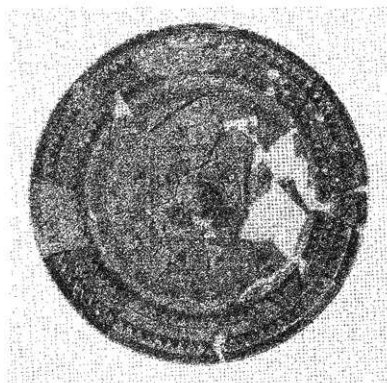
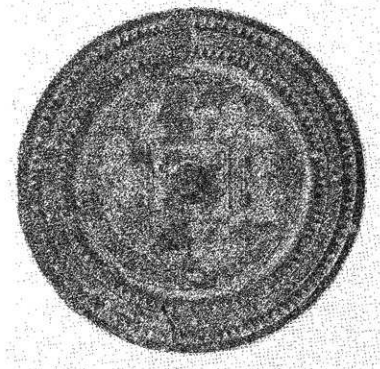


Fig. 13 第5次調査区全景（上から）



方格規矩鏡
(26号鏡 徑15.8cm)



方格規矩鏡
(35号鏡 徑16.2cm)

Fig. II 平原遺跡出土品II (重要文化財)

平原周辺遺跡

(4)

前原市文化財調査報告書 第50集

発行 前原市教育委員会

福岡県前原市大字前原 623 番地

印刷 アオヤギ株式会社

福岡市中央区渡辺通2丁目9-31